



洋書類

証行

一

775
216



門4
775
216

厚書類從卷第三百二十七



檢校保己一集

紀行一

上左日記

木上權頭貫之



とこととすかた日記のつよきものをいかにとてえん
とてよるありきれなりはるりあはるりあり
ひと心乃ぬのしほかすすせのしほあ
しほはくある人ありれよせつ川をさし
乃あそとくかしてあ^解好^由あすむあ
よりああああああああああああ
ああああああああああああああああ

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of dense, cursive script.

Handwritten text in Arabic script, appearing as a short phrase or line at the top of the page.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of dense, cursive script.

Handwritten text in Arabic script, appearing as a short phrase or line at the top of the page.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of dense, cursive script.

ハルニシテ

海に雲の影をうつし
波の音をききし
夕陽の影をうつし
空の色をみし
月夜の影をうつし
星の光をみし
朝日の影をうつし
花の香をみし
鳥の音をききし
虫の音をききし
風の音をききし
雨の音をききし
雪の音をききし
氷の音をききし
火の音をききし
雷の音をききし
電の音をききし
嵐の音をききし
霧の音をききし
霞の音をききし
雲の音をききし
雨の音をききし
雪の音をききし
氷の音をききし
火の音をききし
雷の音をききし
電の音をききし
嵐の音をききし
霧の音をききし
霞の音をききし
雲の音をききし

海に雲の影をうつし

波の音をききし
夕陽の影をうつし

空の色をみし
月夜の影をうつし

星の光をみし

朝日の影をうつし
花の香をみし

鳥の音をききし
虫の音をききし

風の音をききし
雨の音をききし
雪の音をききし
氷の音をききし
火の音をききし
雷の音をききし
電の音をききし
嵐の音をききし
霧の音をききし
霞の音をききし
雲の音をききし

あつちのさあそあはれしそふくをまきまきとて
わろぬまのこまもあつちのそはつせぬひつちと
ありまひつちのさあそ

風はよるあはれしそふくをまきまきとて
らぬまのさあそあはれしそふくをまきまきとて
あつちのさあそあはれしそふくをまきまきとて
あつちのさあそあはれしそふくをまきまきとて

あつちのさあそあはれしそふくをまきまきとて
あつちのさあそあはれしそふくをまきまきとて
あつちのさあそあはれしそふくをまきまきとて
あつちのさあそあはれしそふくをまきまきとて

あつちのさあそあはれしそふくをまきまきとて
あつちのさあそあはれしそふくをまきまきとて
あつちのさあそあはれしそふくをまきまきとて
あつちのさあそあはれしそふくをまきまきとて

あつちのさあそあはれしそふくをまきまきとて
あつちのさあそあはれしそふくをまきまきとて
あつちのさあそあはれしそふくをまきまきとて
あつちのさあそあはれしそふくをまきまきとて

あはれやびとあつらひきりて
うのちよちりてうりきり付は船よのりよ
いありてはのふひとひまはれふかじきりあ
きよひくうのくそはうりかきよあ
うわあつらんとんれ敷の月出るゆてうあり
るその月海よりそふてきりあれとんとせあ
まうれあつらつらうりてをめん津代
よりあつらたひふまうりてあつら
うわうりてあつらうりてあつら
ひもあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて

あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて

あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて
あつらうりてあつらうりてあつらうりて

後撰

うし集

サ一日うれしむりりいねくひなふかひくしれあひ
りりあ終よるまこいまれうふ秋りこのまふしと
ちまらるるうもあひきるおなりもれれよるこ
てしわあひくし月もあひあまた日くしんてし
え終くこのあひくしつりつりまんとしはなせなる
わくありそ終のういふもあひもれれあそく
ふのふいひくしつりつりあひつりつりあひつり
しつりつりあひつりつりあひつりつりあひつり
ましつりつりあひつりつりあひつりつりあひつり
うあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつり
よまらつりつりあひつりつりあひつりつりあひつり

あみとよまらつりつりあひつりつりあひつりつりあひつり
終しつりつりあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつり
あひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつり
とつりつりあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつり
を終りつりつりあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつり
ういふあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつり
つりつりあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつり
とつりつりあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつり
とつりつりあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつり
かたつりつりあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつり
あひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつり
あひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつりつりあひつり

何れもあつてはせむからいふにや

二日舟もよほしつゝ船に上りて船をたがふる
二日舟もよほしつゝ船に上りて船をたがふる風の
吹くをよほしつゝ船に上りて船をたがふる
つゝ船に上りて船をたがふる

あつてはせむからいふにや
あつてはせむからいふにや

あつてはせむからいふにや
あつてはせむからいふにや
あつてはせむからいふにや
あつてはせむからいふにや
あつてはせむからいふにや

あつてはせむからいふにや
あつてはせむからいふにや
あつてはせむからいふにや
あつてはせむからいふにや
あつてはせむからいふにや

あつてはせむからいふにや
あつてはせむからいふにや
あつてはせむからいふにや
あつてはせむからいふにや
あつてはせむからいふにや

かゝるにこそこそとてはたしなむにぞありける
はなれりける

かゝるにこそこそとてはたしなむにぞありける
はなれりける

かゝるにこそこそとてはたしなむにぞありける
はなれりける

かゝるにこそこそとてはたしなむにぞありける
はなれりける

かゝるにこそこそとてはたしなむにぞありける
はなれりける

かゝるにこそこそとてはたしなむにぞありける
はなれりける

かゝるにこそこそとてはたしなむにぞありける
はなれりける

かゝるにこそこそとてはたしなむにぞありける
はなれりける

かゝるにこそこそとてはたしなむにぞありける
はなれりける

じやまきしとくぬまのちりもよみしねの
あつたつちのちりもよみしねのちりもよみしね
あつたつちのちりもよみしね
思ふ神のまはちとせよみしね
くちかちよしつれきゆやよみしね
らつたつちのちりもよみしね
まひしよつちりもよみしね

延長八年庚申作持國よりなりて兼平六年
私事よりなりてはまはた敬あつたつちりもよみしね
沖とせよみしねつちりもよみしね
よめり

百草をたのむをよみしね
のち

耳云

上巻日記の貫之自筆本

故將軍御物希代之靈寶也今度考之自小河沖下

中出之條或人抄号源切而之書之古代假名遣料

未愚際寫有尊莫式は見筆察之云也

明應壬子仲秋候

亞槐藤原判

本巻日記の作作者自筆特字平書寫後假名を相違多
不致私改而以杖葉檢葉条及添布印平校合畢

天保己亥二年正月九日寫之

中村直道

いふ思

増基法師

心川より水あふらあると云ふ世に
まゝあはれ海乃まゝり河乃まゝと物色
心くせのありききこくまゝくあゝお
うゝさぬまゝつひと心とちのうらひさう
とよとちつゝあまみあゝゆつり秋乃の
法ををせぬらむさむとあひ入むなりいふ
ゆゝをせぬひなる神を月の十日つり怒野へ
まゝとけり人こり病ありあゝあゝあ
有らまゝと秋乃あゝあゝあゝあゝあゝあ
思ひくゝとさうゝゝあゝあゝあゝあゝあ

竹のちゆぢとて中夜ひさしよこたぬひのよ
きく吹あつくしそよあそそあり初うつく
ひき春に花吹は杖をのみちりよるるま
あひひうゆきあたふくほのふかく船の
あひた月よみのあそそあまきののちうね
しゆゆく人ゆく

世中ひさし程せんはらなき後のよあはれものし
しつこむる儀をののめしそあはれうさし
秋あふよゆ^たあはれゆくゆきにほるる杖のあそあはれ
死のあはれ吹とらうゆらうゆらる月しゆも
しゆらし世中ひさし人帯りしつりて

あそゆとつひのゆくあはれあはれうさし
あそしゆらしそあはれのあそあはれそうあはれ
あり疾のあはれあはれくまいたあはれうあはれ
霜うららしゆゆ風をうららむしうてまゆ
らららゆとくあそよあはれあはれしゆら
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれのあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

よらあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
月乃海のあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あまの思ひ

月・浪のふかき水にまはるる花の影を
遊あまの思ひのふかき水にまはるる花の影を

浪あまの思ひのふかき水にまはるる花の影を
ゆあまの思ひのふかき水にまはるる花の影を

あまの思ひのふかき水にまはるる花の影を
あまの思ひのふかき水にまはるる花の影を

うかき舟のまはるる水にまはるる花の影を
うかき舟のまはるる水にまはるる花の影を

石のふかき水にまはるる花の影を
らあまの思ひのふかき水にまはるる花の影を

うかき舟のまはるる水にまはるる花の影を
あまの思ひのふかき水にまはるる花の影を

うかき舟のまはるる水にまはるる花の影を
あまの思ひのふかき水にまはるる花の影を

うかき舟のまはるる水にまはるる花の影を
あまの思ひのふかき水にまはるる花の影を

うらむしらねをむしめしとれをば入んぬ
りてはせりてくうく人のあひてはるる
ふりて魚にかなれとてねたなり
とて二浦のへるあつとれぬてり
かまひてたぬあつとれぬてり
申くしとて

り海苔原にすしつとれぬとて
るあつとれぬ

かまひて浦のへるあつとれぬとて
かまひて浦のへるあつとれぬとて
あつとれぬとて
あつとれぬとて

後濃乃とてあつとれぬとて
かまひて浦のへるあつとれぬとて
あつとれぬとて
あつとれぬとて

りてはせりてくうく人のあひてはるる
ふりて魚にかなれとてねたなり
とて二浦のへるあつとれぬとて

百代の神とてあつとれぬとて
そはせりてくうく人のあひてはるる
ふりて魚にかなれとてねたなり
とて二浦のへるあつとれぬとて
かまひて浦のへるあつとれぬとて

こゝろを〜とての事とあり〜とてと終
〜

白が花月も〜とてはあつたが方遠〜と終
〜

玉乃と〜とての事とあり〜とてと終
〜

〜とての事とあり〜とてと終
〜

〜とての事とあり〜とてと終
〜

〜とての事とあり〜とてと終
〜

〜とての事とあり〜とてと終
〜

〜とての事とあり〜とてと終
〜

〜とての事とあり〜とてと終
〜

〜とての事とあり〜とてと終
〜

〜とての事とあり〜とてと終
〜

〜とての事とあり〜とてと終
〜

とく袖のぬきまはた

わらわのさけはなすかうの着る袖まのころをまはる
ころ漢の入るぬきまのそのとくははたぬ
るれにやとくぬきまのひるの中ととうりち
縁とこちまをたのたりけりこのまにみりく
わらけのまはるんふふとりぬきまぬは
んとすの縁ありて人ほひふくとうりて
やうにまはるこふまにぬきまはたは
ろせふあひのたのぬきまのぬきまのぬき
はうはひまのぬきまのぬきまのぬきま
あはひぬきまのぬきまのぬきまのぬきま

あつたうのぬきまのぬきまのぬきま
ぬきまのぬきまのぬきまのぬきま

法にぬきまのぬきまのぬきまのぬきま

たのぬきまのぬきまのぬきま

心あつたうのぬきまのぬきまのぬきま

天人のぬきまのぬきまのぬきま

とく人のぬきまのぬきまのぬきまのぬきま

早九流のぬきまのぬきまのぬきまのぬきま

うらうぬきまのぬきまのぬきまのぬきま

うらぬきまのぬきまのぬきまのぬきまのぬきま

まはるぬきまのぬきまのぬきまのぬきま

刑をせきくくしはのちのちうりかしのやをを
あり

う原をせらるる河のきさう成そる橋たらしまを
伊勢の國のくちかしのひさるたよえわたりと
いふとさうとさうたすてあやうにたまたま
小通もるとはねらくる中まき海りかた
夜のあらあふらまこ

う原をせらるる河のきさう成そる橋たらしまを
あよ改めえしとまきひほふさうらりやり
まきとまきのひさるちまきへあうたよとあ
あまのあまのこりちまきとたたしんあま

たきよなるとまのひさる入らして國をた
あひはるあまのひさるあまのあま

あまのあまのひさるあまのあまのあまの
とくまちあまのあまのあまのあまの
はひらとくまのあまのあまのあまの
うさくまのあまのあまのあまのあまの
おませしあまのあまのあまのあまの
うさくまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのひさるあまのあまのあまの
あまのあまのひさるあまのあまのあまの
あまのあまのひさるあまのあまのあまの
あまのあまのひさるあまのあまのあまの

わりの〜を

まういはいしゆいゆなるいなるお家人とあるおれは
おきおるらあゝと母乃われたゆもお申の
らういあゝいあゝいあゝいあゝい

いよまじ風はさうい秋の葉はまゝいあゝいあゝいあゝい
舞のふ舞うあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝい
おの〜月の十日あり〜月いづらう〜を
あゝいあゝい侍〜あゝいあゝいあゝいあゝい
まゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝい
おの〜あゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝい
いそゆれい

^{わ吉}てあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝい

まゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝい

はゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝい

うせうあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝい

あゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝい

すゝいあゝい

まゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝい
あゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝい
あゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝい


~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~


一 如く

うづつらも、車路の園とありて、^{ついで}あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

一 如く

うづつらも、車路の園とありて、^{ついで}あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

うづつらも、車路の園とありて、あつたりとあり

人あつてはなつかしくも

とてふ人こそかたきなりけり
よこし人の心もさかたけり
こと

あそびもみたまふ人
そのまはれさうりなく
よわうもさうりなく
と

海ふすこも海ふす
たうりねり
ふあふに人あま

あつこ山つーの

かぶあめなりそ
そは秋の
こまりて
こはのち

あふこあふ

海ふすこも海ふす
こまりて

あふこあふ

旅人あつてはなつかしくも
かわらぬあつてはなつかしくも

て九百

有るものもなきものもあつた縁はまじりてはなれど
也

由ありまらひし海も物ありしは枯道はまじりて
あざりてうらな海もあざりてあざりて
日のもあざりてあざりてあざりて

うらなもあざりてあざりてあざりてあざりて
あざりてあざりてあざりてあざりて

乃しや海はまじりてあざりてあざりてあざりて
うらなもあざりてあざりてあざりてあざりて
あざりてあざりてあざりてあざりて

うらなもあざりて

あざりてあざりてあざりてあざりて
あざりてあざりてあざりてあざりて
あざりてあざりてあざりてあざりて

右の如く一巻以西相の氏々真蹟書寫以杖書拾遺集
及一本校合畢

天保四年正月十日書

中村直道

